HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 言語単位の抽象性 |
| Author(s) | 川島, 淳夫 |
| Citation | 独語独文学科研究年報, 4, 1-14 |
| Issue Date | 1978-02 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/25509 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 4_P1-14.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 言語単位の抽象性

川島淳夫

0. 言語記号が質料としての音声（あるいはまたその代理である文字）と概念とから成り、さらにそれらが一定の文法的規則に従って配列され、伝達手段として使用されることについて、従来、さまざまな理論が展開されている。たとえば、ド・ソシュール（１９１６）における能記と所記とから成る記号の考え方がそれであり、その後さらにその修正案が出されているが、それは意味の面での研究の深化にともない意味素性（Sem）といった新たな単位が加ったことによる。音声面においても未分化の概念である音から、音素（Phonem）を対立する音という単位として捉えることを経て、弁別的特性の束として把握するに至り単位の抽象化の度合を増大した。

統語論の分野においても、最小単位の分解（Dekomposition）の導入によって、語彙項目は最小単位ではなくなり、意味元素（semantische Primitive）に分解されるに至った。ここにおいて、言語における単位の位相（Status）が問題となるのである。

1. 言語における単位とはいったい何であるか。単位とは構成物を構成する要素であり、それ自体分解できないもの（Entität）である、と考えられるが、問題はいかに構成するかにある。ある物を直接構成するか間接に構成するかによって単位の大きさ（Größe）が当然異なり、その位相も異なってくる。言語自体も単位であり得るし、談話（Diskurs, Text）も文（Satz）もその成分（Konstituente）も語（Wort）も単位であるとされる。語は文論の単位としては最下位の単位であり、造語論の単位としては最上位の単位である、とも言われる。ところがSyntaxとSemantikに本質的境界が認められないとする立場に立てば、そのような区別は不要のものとなる。

すなわち、単位というものは、言語に対する観察者の態度ないしは文法観によって変り得るということができる。たとえば、文成分（Satzglied）という単位があるか否かは、文の分析の仕方によってきまるし、品詞の決定もまた分析方法によってまちまちの結果を生むに至る。たとえば、Ch. フリーズは英語の単語の分類において、ある一定の枠組にあらわれ得る語のパラディグマ的な部類を集めてこれを品詞とする方法をとった。従来の伝統的文法においては、形態、意味、機能という三つの規準を恣意的に用いて品詞を分類し、ドイツ語では１０品詞が認められていた。ところが、文の構造を深層構造と表面構造という二つの観点からみる生成文法においては、従来の伝統

文法における品詞が深層構造においては存在しなくなると考えられる場合も出て来て、深層における単位はより減少するに至る。たとえば、表面構造の品詞である動詞、形容詞、副詞、前置詞は深層において動詞一つとなるのである。一方また、動詞はすでに述べた如くさらにいくつかの意味元素に分解されて、そのいっそう抽象的単位の数をふやすことになったのである。

単位は元来抽象的な概念で、具体的な語形で実現される面と表象できる意味内容を具えているが、分解された語の構成要素は具体的形態を実現しない。たとえば、McCawleyの説によれば、kill という語彙項目は、CAUSE BECOME NOT ALIVE という要素に分解されるが、これがつねにこの形で実現され得るわけではない。ドイツ語にはfallen という動詞があるが「落とす」という語がなく、fallen lassenという。これは「落とす」という語の分解された形が、そのまゝで実現され、一語にならなかった、つまり語彙化しなかった例とみられる。fällen は fallen の「倒れる」という意味に使役の lassenを加えたものであるから、これはFALLEN LASSEN という二つの要素に分解できるが、fallen lassenとは同義でない。

さて、単位というものは特定の文法の枠の中で認定されるもので、絶対的な存在物ではない。これについて、Halliday(1961)は、次のように言っている。"The category set up to account for the stretches that carry grammatical patterns is the unit (文法的なパターンを担う実体を説明するために立てられた範疇が単位である。)単位はたんに長さをもつもの(stretches)ではなく、それは文法的なパターンを担っていなければならない。文法的なパターンは音声的文法的形式だけでなく、意味的、文法的形式を含むと解釈される。Hammerström(1976)は、単位unitと項目itemを区別し、項目は単位の実現形であるとし、人間の用いる自然言語の単位は基本的には次の諸観点から特徴づけられるという。

(a) The expression side of the units is either spoken or written.

(b) The units are arbitary in the sense that in one language a particular unit of content is expressed by ox whilst in another language a comparable content is expressed by boeuf.

(c) The units are conventional in the sense that they are within particular societies.

(d) Units are segmentable (if they are long enough). An utterance may consist of syntactic constructions.

(e) Units are linear in the sense that segments follow one

another in time, and, in space, in (most) written languages.
構造主義の立場に立つHammerströmの考えている単位は、表面的構造を構成する単位である。単位が発話を分割することによって得られる分節（segment）であるというように、発見手順を必要とすることは見逃してはならない。Hammerströmは単位と項目を対比させて、次の特徴を挙げている。単位はsounds, letters, words, syntactic constructions, parts of form, elements of system, sets, invariants, abstractions, types という形をとり、項目の方はparts of substance, parts of speech acts, elements of sets, variants, concrete examples, realisationsであるとする。ここでとくに注目すべきは、単位は抽象物であり、言語体系の中の不変項であるという点である。つまり、どのような言語体系を認めるかによって単位もその数も変ってくることになる。

そこで、言語の体系と言語学の体系の関係が当然問題となってくるのである。

2. 言語は話されたものにせよ書かれたものにせよ、eticな面とemicな面をそなえもっている。前者はパロル的な面であり、後者はラングに属する面である。言葉をかえて言えば、言語は話し手または書き手の個人的な運用によって現われる面と体系的な不変の面があるのである。ドイツ語を構成している要素をみると、たとえば発音の面では個人によってさまざまな発音が観察される。文字の面ではgと書いてあるものが実際の発音においては〔g〕,〔ɣ〕,〔ç〕,〔j〕,〔x〕,〔k〕,といった形で実現されることがある。たとえば、Tagは〔ta:k〕,〔tax〕となり、irgendは〔IRjənt〕〔IRgənt〕,(es)regnetは〔Re:çnət〕となるといった具合である。ganz gut をjanz jutのようにいうドイツ人もいる。これらは、多分に地方的差異であるといえるが、一人の人がgを六通りの発音をした例を観察したことがある。gが現われる位置によって〔g〕ともなり〔k〕,〔ç〕ともなるのは標準的なドイツ語においてもみられるところである。

König 〔kφ:niç〕

Gast 〔gast〕

Tag 〔ta:k〕

ドイツ語のgが〔g〕,〔k〕,〔ç〕で実現されるのはそれの現われる位置ばかりではなく、意味とも関係がある。tacという中世語と現代語のTagが同一の意味をもつことは明らかであるが、現代語のTagがTakと書かれないのは、Tag:Tageというように複数でeが現われるため、「一日」を示す語は単数でTagであると解釈され、それが正書法に反映したものといえよう。同時にまた、単数の属格、与格がTages, Tageとなることからも、主格、対格がTagであると考えられる。すなわち、Tagのgは語尾において、中和され〔g〕と〔k〕の対立を失ったものである。このような解釈はたんに正書法に反映するばかりではなく、語の意味の記述にとっても重要

である。Tot と Todの違いはもっぱら意味の違いによって区別される。発音は等しいので、聴覚的には識別できない。

このように、形態論的単位と音韻論的単位は不可分の関係に立っている。このことは各分野間のレベルの截然とした区別が困難であることを意味するものである。現在、ドイツ語ならドイツ語といった個別言語の研究においては分野別にそれぞれの単位が設定されているが、レベルの上下に密接な関連があり一つのレベルだけで説明の困難な場合が少なくない。語のレベルと語の複合体、あるいは文成分のレベルの交差があり、いずれの単位に属するか不確定の要素がある。これは言語そのものの体系上の現象か、言語を分析する理論の不備によるものであろうか。たとえば、ドイツ語の正書法をみると次のような不一致が多数みられるのである。

darüber hinaus → darüberhinaus

Gott sei Dank → gottseidank

an Hand → anhand

mit Hilfe → mithilfe

an Stelle → anstelle

zugrunde liegen → zugrundeliegen

などはその一例に過ぎない。中世語から現代語に至る過程において、bei hand → behende や ze wâr → zwar となったものについては、現代語の話者たちはすでにその構成要素についての意識がなくなっているが aufgrundなどの語については、aufと Grundという二つの語が意識されているばかりでなく auf Grund と分ち書きをする人も多い。そればかりか同一の人が同一のテキストで両形を用いているという例もないわけではない。そうすると、一人の人にとって二つの単位と一つの単位が同一であるという矛盾した現象がドイツ語にはあることになる。これを説明するためには一つの方法が必要である。その方法とは、aufgrundも auf Grund も品詞のレベルに属するのではなく、文成分の結合詞とみることである。すなわち、正書法にとらわれず、文成分結合詞という新しいレベルの単位を設定することを考えることである。Vergiβ mein nicht!が das Vergiβmeinnichtという名詞に変ったことはよく知られていることであるが、これは文そのものが語のレベルに下ったものであり、Haus halten が haushalten となったのは句が語に変ったものである。haushalten の中にはすでに名詞は含まれていない。Haus → haus のように語形が正書法上も変っている。ところがRecht habenがrecht haben になると事はやっかいである。語彙化が起こる寸前の状態が正書法に現われている。このことは in bezug auf という表現にもみられる。ドイツ語では単位に対する話者の意識が正書法にかなり反映しているが、実際にはさほど明確なものではない。deutsch sprechen,Deutsch sprechenの違いについては殆んどの人が説明できない

といえるだろう。ドイツ人の間で名詞の大文字書きがよいか小文字書きがよいかの議論がなされているが、過去の書記伝統からの断絶をいとわないならば、小文字書きにするのが、ドイツ人にとっても外国人にとってももっと楽になる筈である。（ただし書く側からの場合に限る。）

文法研究は正書法にまどわされてはならない。したがって、上記のような正書法上の不一致をはなれてドイツ語の体系を明らかにしようとするならば、ドイツ語そのものにどのような言語学的レベルが認められるかを問わなければならないであろう。現在行なわれている文法研究ならびにその分野及びその分野での研究者を挙げるならば、次の図のようになる。（もちろん、これは大ざっぱなものに過ぎない。）

| Komponenten | | | Oberflächen-struktur | Tiefenstruktur |
|---|---|---|---|---|
| Sprachwissenschaft | Synkronische Linguistik Emic | Textgrammatik | Text | Semantik | Hendricks/Kristeva/Ihwe |
| | | | | Syntax | Dressler/Schmidt/van Dijk |
| | | | | Pragmatik | Wunderlich |
| | | | | Phonologie (suprasegmantal) | |
| | | Satzgrammatik | Satz | Sematik | Katz-Postal/Chomsky/Jackendoff |
| | | | | Syntax | Bloomfield: McCawley/Lakoff/Gurber/Ross |
| | | | | Morphosyntax | Fillmore/Postal Tesniere/Engel/Glinz |
| | | | Wort | Lexikologie/Wortbildung | Nida/Erben/Henzen |
| | | | | Morphologie | Marchand/Fleischer/Hartmann |
| | | | | Semantik | Greimas/Trier/Gruber/Leech |
| | | | | Morphophonologie | |
| | Phonetik Etic | | Laut | Phonologie | Jakobson/Halle/Chomsky |
| | | | | (segmental) | Trubetzkoy/Firth |
| | | | | experimental | |
| | | | | artikulatorisch | Zwirner/Jones/Malmberg |
| | | | | auditiv | Fant/Halle/Lehiste/Ladefoged |
| | | | | akustisch | |

これをみると、各分野ごとに大きな単位があり、上位の分野から下位の分野に至るに従ってより小さな単位が認められる。同時に、表面構造の単位と深層構造における単位とでも単位概念に差異が

みられる。単位というものは理論の所産であって、どの分野においても普遍的に通用するわけではない。

いま、諸単位とされているものを挙げるならば次のようなものがある。

Sprache, Text, Diskurs, Rede, Satz, Satzglied, Wort, Wortgruppe, Laut; Textem, Syntagmem, Morphem, Phonem, Semantem, Sem, Lexem, Prosodem, Konturem, Tagmem, Taxemem, Taxem; Endkette, Formativ, Semantische Primitive, Präterminale Kategorien, Konstituente, Ko-Konstitente, Skopus, Proposition, Prädikat, Argument; Subjekt, Objekt; Aktant; Thema, Rhema; Topik, Komment; usw.

これらの諸単位を理論を無視して並べても、全く無意味であるが、ある理論に従えば、これらの単位は整理されねばならない。統語論レベルと音韻論のレベルにおいて用いられる単位を例にとるならば、日常的言語から用語となったものは、Item の方を表わすのに対し、Unitの方は-emという抽象化されたものが用いられる。

| | | |
|---|---|---|
| Ebene | Varianten | Invarianten |
| | Text | Textem |
| | Satz | Taxem |
| Rang | Satzglied | Taxem/Syntagmem |
| | Phrase | Taxolem/Syntagmem |
| | Wort | Lexem/Monem |
| | Endung | Morphem |
| | Laut | Phonem |

日常言語は必ずしも言語の構造を充分に表現できないし、まだ曖昧な意味用法をもっているので、正確な言語記述には適していない。したがって、全く新しい用語が作り出されるか、従来の用語、日常語に新しい定義が与えられることによって、これらの不備が補われることになる。古くは文法用語は論理学から採り入れられもした。Subjekt, Objekt, Prädikat などはその例である。長い間論理学的な視点から文の構成が考えられていたために、文を構成する単位がSubjekt, Prädikatであると考えられ、これが機能的な名称であることに気づかれなかった。チョムスキー(1965)はこれらはNPやVPといったカテゴリーのもつ機能であることを明らかにした。一つの文をとってみても、話者のPerspektive からみた単位としてはThemaやRhemaあるいはTopikやKommentがあるが、動詞との従属ないし依存関係からみると、Aktant やZirkonstant が得られ、格の面からみるとAgens, Ziel, Experiencer といった単位が得られる。これらは、いかに言語単位が言語理論に依存するものであるかを証明している。

Subjekt やObjekt が必ず存在しなければならない言語もあるし、Thema や Rhemaがあればsubjektや Objekt の不要な言語もある。Subjekt と Thema が一致する場合もある。次の日本語の例では、Thema(Topik) と Subjektが並立しているが、Topik はそこでは元来目的語であったものである。

第一セットは日本がとりました。

主 題　　主語

この文は「日本が第一セットをとりました」と同義であると考えられるが、「第一セットを」という部分が主題化され、文頭に置かれ、助詞の「は」が付けられ、さらに「を」が消去されたことにより、「第一セットは」が主語のようにみえるのである。

第一セットは取られました。

においては、下線部が主語とも主題とも解釈できるが、「我々は」という語を補ってみればこれが(すなわち、「第一セット」が)主題であることが判明しよう。(主語とみることも可能だが。)

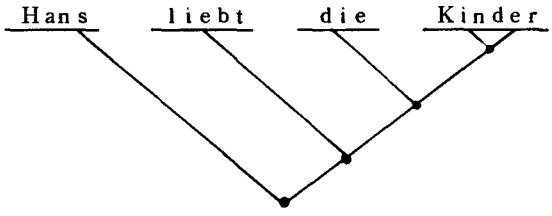
要するに日本語においては主語より主題の方が明示的に顕われる可能性が多いのである。これを裏返して考えるならば、主語、述語、目的語といった文法的単位(機能的単位)だけでは文法現象の説明に困難を来たすことになるのである。日本語に、二重主語があるといったB. ウォーフの時代には文法論がまた不充分であったために、日本文の真の姿が見抜けなかったのである。

3. さて、従来の文法は文とそれ以下の言語現象を研究対象、記述対象として来たが、文を構成する要素として、表面的な構造の分析に終始したIC分析に対し、深層構造を想定した生成文法における分析では単位の設定の上に大きな違いがみられるが、とりわけ興味のある点は文の上位と下位にきわめて抽象的な要素の加わったことである。

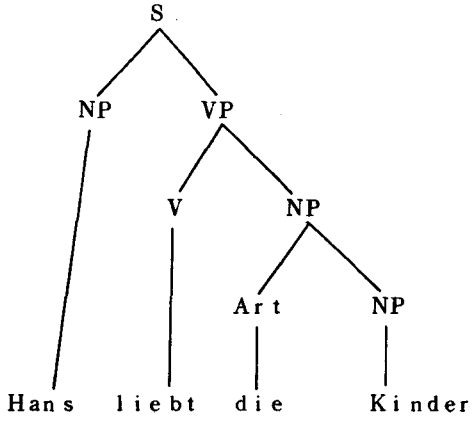
IC分析においては、文の構成要素として不連続な要素つまり不連続の単位という本来的な単位の意味に反する要素を認めざるを得なくなったが、生成文法においては、深層構造の仮定によってこの問題を乗り越えた。連続する単位が表面構造において不連続の形となって実現されるとするわけである。さらに進んで、統語論的深層構造と意味構造は本質的に境がないとの考えから、語彙項目がさらに下位の単位から構成されることを主張するものと、発話行為理論に基づいて文より上の抽象的文を仮定することによって文の構造をいっそう抽象的にする考えが現われるに及んで、文を構成する単位は、非明示的な遂行動詞から下に至っては、意味述語(Semantische Prädikate)あるいは語彙項目以前のカテゴリー(Prälexikalische Kategorien)の編入などの現象があると指摘されるようになる。このように文の構成単位の抽象化は上部と下部において起ったのである。不連続の要素を連続と考えたことが、文の中部で起ったことと考えるならば、単位の抽象化は中部、下部、上部へと移ったことになる。

これらの言語単位のあらわれ方を図示的に表わすと、次のようになる。

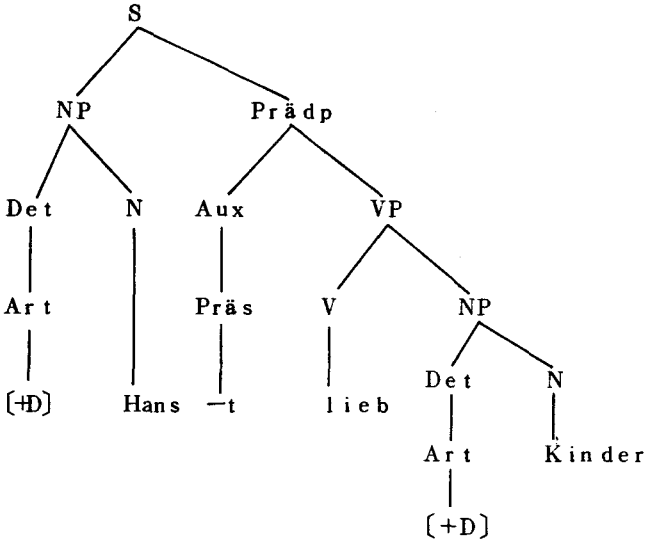
1. IC—Analyse(Wells)




2. Oberflächliche Phrasenstruktur(Chomsky)

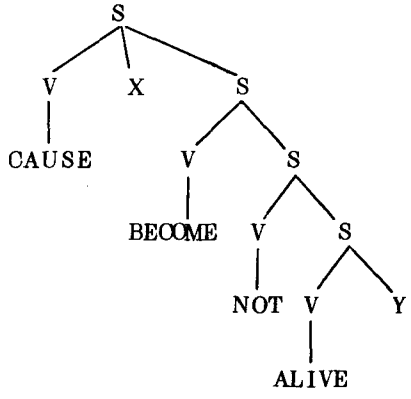



3. Tiefenstruktur(Chomsky)

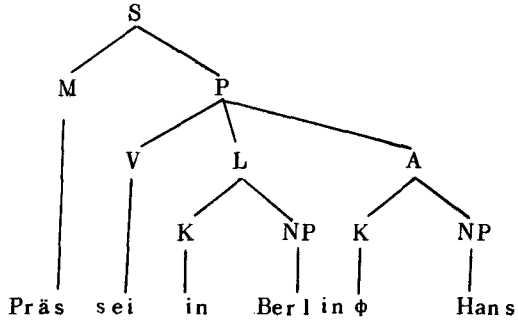


4. Semantische Repräsentation( McCawley)

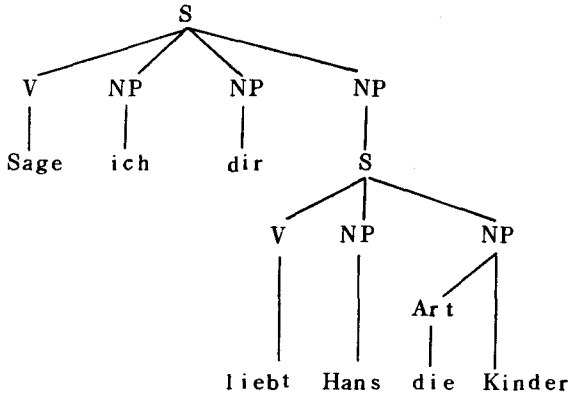
X kills Y



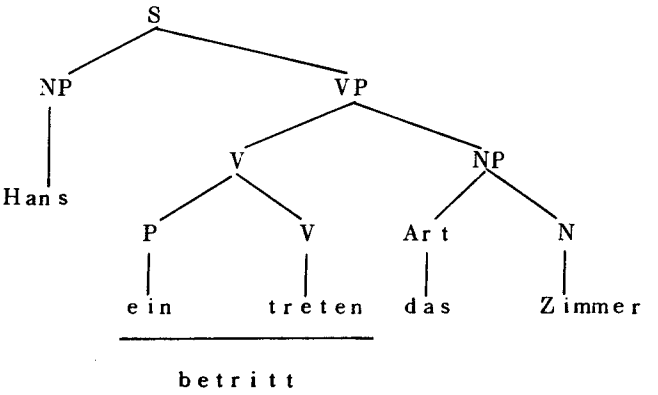

5. Fillmore




6. Ross



7. Gruber




これまでにみられる諸説において、語彙項目前の要素に分解された単位は、動詞、前置詞、副詞がある。一方、上位の文が付加された場合は遂行動詞に限られているが、ドイツ語の接続法の文などは遂行動詞でない動詞も考えられよう。いずれにせよ、言語単位が上方と下方に向って抽象化されて行くのは興味ふかいことである。音韻論においてはすでに、音素が最小の単位ではなく、弁別素性に下位区分され、音素は弁別素性というより小さな単位の束と考えられている。弁別素性は音素より更に抽象的なものである。なぜなら音素が単音の形で実現されると考えられていたときは単音という実体があるが、弁別素性そのものは、単音にそなわる性質だからである。

このような単位の分解（Dekomposition）を図示すれば、表現面と内容面について次のような対応がみられる。すなわち、意味単位と音韻単位がいずれも素性の束として考えれる点である。

| 表現面 | 内容面 |
|---|---|
| distinktive Merkmale | semantische Merkmale |
| Jakobson/Halle | Katz：semantic marker |
| Halle/Chomsky | distinguisher |
| | McCawley：Semantic Primes |
| | Gruber：prälexikalische Kategorien |
| | Greimas：Sem/Klasem/Semantem |

Katzにおいては、音韻論の弁別素性を意味の説明のためのモデルにした点であまりにも単純すぎたといえるが、McCawleyにあっては、動詞がその成分に分解され、そこに統語的階層性を見た点において新機軸がみられた（このことはすでに、Weinreichが１９６６年に暗示していたこ

とである)。しかし、動詞以外の語彙項目についての記述においては、Greimas のSem による説明によるほかないのではないかと思われる。

言語単位がこのように抽象的になればなるほど、文法的説明自体が抽象化の道をたどることになる。分解された語義が、諸特性・素性の記号化を経て論理的表記を受けると、言語記述が一見精密化したかにみえるのであるが、言語単位の抽象化と記号化とは区別されねばならない。

現代の意味論が生成意味論を通じて、論理学的意味論へ接近していった背後にはこうした語彙項目の(意味の)分解という過程があったのである。McCawleyは(CAUSE)(BECOME)(NOT)(ALIVE)→killのごとく、Postalは(STRIKE)(LIKE)→remindとして、そしてFillmoreはACCUSE〔Judge,Defendant,Situation(of)〕

Meaning: SAY〔Judge, 'X'. Addressee

X=RESPONSIBLE Situation,Defendant

Proposition: BAD(Situation)

のように、kill,remind,accuse という語を分析するのである。こうした意味記述は、動詞の意味元素による動詞の記述であるが、これが文の意味表示の一部を成すのである。だが、この方法によった場合、すべての動詞が意味的述語に分れるとして、いったいどの程度の数の意味的述語に還元されうるかという疑問が生じる。またドイツ語のwerdenやlassenはそれ自体で意味元素なのかどうか。法助動詞などはどのような意味元素に還元できるのか。こうした語彙項目の分解には、これからさまざまな考察が加えられねばならないであろう。

4. 以上は言語内在的な単位について概観したのであるが、ある文の意味を正確に記述しかつ理解し得るためには、言語外在的な要因がいかに言語内在的単位に反映しているかを明確にしなければならない。すなわち、ある文の発言者(これは代名詞によって表わされる。たとえば„ich")の同定、発言のかかわる世界、発言者の場所などの明示が必要となるのである。あるいは、ある文の成立に必要な前提もまたその文を構成している単位以外の要素である。次のような文が適格な文でないことを説明するには、言語内在的単位のみに頼るかぎり不可能であって、言外の意味、含意、前提といった概念なしには説明がつかない。

a. Wenn sie verheiratet ist,hat sie keine Kinder

b. Wenn sie Kinder hat,ist sie nicht verheiratet.

a文もb文もともに言語的単位は文法的規則に従って排列されてはいるが、条件文(仮定文)と帰結文の間に矛盾が生じている。「結婚していること」と「子供があること」とは必然的関係をもたないのであり、またそれらの否定文も同様に必然的関係はない。したがって、前者が後者の前提ともなり得ないし、後者が前者の前提ともなり得ない。それゆえ、a文にせよ、b文にせよ、また次

のようなc文、d文とも意味的に不適格な文となるわけである。

c. Wenn sie nicht verheiratet ist,hat sie keine Kinder.

d. Wenn sie keine Kinder hat,ist sie nicht verheiratet.

言語的表出が真に意味をもつためには、このように言語内在的な単位ばかりでなく、その発話をめぐる内包的脈格（intensionaler Kontext）〔発話、発言時、発言内容の世界〕が発話の受信者にも明示されていなければならない。これは言語表出の有意性を裏づける実用論的要素（Pragmatische Faktoren）である。これらの要素が語彙項目の内包である諸意味素性と共に有機的に組み合わされてはじめて、文の意味記述がより正確（ないしは精密）なものとなる。文の理解とは、結局文の意味の理解ということであるから、文を構成している単位間の諸関係と文の成立するための外的要因を手がかりとしてはじめて、その目的が達せられることになる。こうした理解を明示的に記述するのが内包的意味論であり、広義の意味論である。それは言語実用論の枠組の中におさまるべきものなのである。

こうみてくると、言語単位には音韻論上の弁別素性といったアトミスティックな単位や、統語論上の単位とそれの範囲（Skopus）や文の前提、抽象的な上位文、可能なる世界といった諸単位（これらのすべてを単位と呼んでよいとすればの話であるが）は文法的記述にとって不可欠のものである。こうした単位を発見・認識することが、言語研究の出発点でもあり、同時に終極の目標でもあるといえよう。アリストテレスのみたOnoma,Rhemaといった単位が、主語、述語、目的語といった機能的の統語的単位として敷衍され、遂には現代言語学において、遂行文や意味元素へと発展した過程をつぶさに見るならば、この間の事情が髣髴とするであろう。

Bibliographie

Brame,M.K.: Conjectures and Refutations in Syntax and Semantics.Amsterdam: North-Holland 1976.

Bünting,K.-D.: Einführung in die Linguistik.Frankfurt/M.: Athenäum 1972.

Chomsky,N.: Studies on Semantics in Generative Grammar.The Hague: Mouton 1972.

Ebeling,C.L.: Linguistic Units.The Hague: Mouton 1962.

Fordor,J.D.: Semantics.Theories of Meaning in Generative Grammar.New York: Thomas Y.Crowell 1977.

Greimas,A.J.: Sturkturale Semantik.Methodische Untersuchungen.

Braunschwig: Vieweg 1969.

Grinder, J.T.: Guide to Transformational Grammar. (Chapter 10. Genrative Semantics vs. the Extended Standard Theory) New York: Holt, Rinehart and Winston 1973.

Gruber, J.S.: Lexical Structures in Syntax and Semantics. Amsterdam: North-Holland Publishing Co. 1976.

Halliday, M.A.K.: Categories of the Theory of Grammar. In: Word 17(1961), 241-292.

Hammarström, G.: Linguistic Units and Items. Berlin: Springer Verlag 1976.

Katz, J.J.: Interpretative Semantics vs. Generative Semantics. In: Foundations of Language 6(1970), 220-259.

Lakoff, G. & J.R. Ross: Is Deep Structure Necessary? In: Syntax and Semantics 7(1976), 159-164.

McCawley, J.D.: Prälexikalische Syntax. In: Seuren (Hg.), 98-114.

Matthews, P.H.: Morphology. An Introduction to the Theory of Word-Structure. London: Cambridge Uni. Press 1974.

Partee, B.H.: On the Requirement that Transformations Preserve Meaning. In: Studies in Linguistics. ed. by Ch.J. Fillmore and D.T. Langenoen (1971), 1-21.

Postal, P.M.: On the Surface Verb "Remind". In: Studies in Linguistic Semantics. Ed. by Ch.J. Fillmore and D.T. Langendoen (1971), 181-270.

Ruwet, Nicolas: An Introduction to Generative Grammar. Amsterdam: North-Holland 1973. Besonders Apendix II 315-343.

Seuren, P.A.M.: Generative Semantik: Semantische Syntax. Düsseldort: Schwann 1973.

Seuren, Pieter A.M.: Zwischen Sprache und Denken. Wiesbaden: Athenaion 1977.

Syntax and Semantics 7(1976). Notes from the Linguistic

Underground. Ed. by James D. McCawley. New. York: Academic Press.

Semantics. An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology. Ed. by D. D. Steinberg & L. A. Jakobovits. London: Cambridge U. P. 1971.

Hartmann, R. R. K.: The Language of Linguistics. Reflections on linguistic terminology. Tübingen: TBL 44 1973.

（文学部助教授）